

2020年8月18日(火)、20日(木)、22日(土)
PASCAL入試 ～オンラインLTD体験会～
＜予習教材＞

バークレー日記より
「Deportees (追放者たち)」
山岡 政紀 (創価大学 文学部教授)

※著者の許諾を得て掲載しています。

アメリカの音楽

アメリカに来てからも、自宅で聴く音楽は、メキシコやキューバのラテン音楽ばかりだ。その地の音楽を好きになるということはその地が好きになるということだ。だから私は、ジャズ・コンサートなどにも何度か出かけた。奏者のテクニックの華麗さ。時に迫力があり、時にムードが漂い、ジャズも悪くないと思う。ただ、私自身の嗜好性が根本的にジャズに向いていないらしく、CDを買って自宅で聴こうというほどの欲求はおきてこないのだ。

アメリカの音楽にはジャズ以外にも、宗教性のあるゴスペルや、土着性の強いカントリーなど、いろいろある。きっと私がまだ出会っていないだけで、すばらしい音楽はこの国の宝箱にいっぱいつまっているのだろうと思う。

アメリカに来てから知った歌で、一つだけ、私が見つかり、何度か何度か繰り返し聴いた、そして今も聴いている曲がある。それは、40年近くも前にとうに亡くなっている、ウディー・ガスリーのフォーク・ソングで、“Deportees” (追放者たち) という曲だ。

ボブが貸してくれたCD

カリフォルニア大学バークレー校(UCB)が海外から来た留学生や私のような客員研究員のために、希望すればボランティアの英語教師を紹介してくれる制度がある。私がこの制度を利用して紹介してもらったのが、85歳と高齢のボブだ。ボブはUCBの公共福祉学部でかつて

教鞭を執っていた退職講師だったが、退職後の社会貢献の一環としてボランティアに登録していたのだ。私はほぼ一週間に一回、ボブの自宅を訪れ、単なる英会話の雑談に始まり、必要が生じるたびに「こういう時はどう言えばよいのか」と尋ねてみたり、サー教授に提出する英文論文のネイティブ・チェックをしてもらったりした。そのボブに、あなたの好きなアメリカの音楽を何か一つ紹介してほしいと頼んだところ、彼が私に貸してくれたのが、ウディー・ガスリーの名曲を集めたベスト・アルバムのCDだったのだ。

しかし、そのCDはウディー・ガスリーが残した曲を最近のシンガーたちが歌ったもので、彼自身の歌声ではなかった。そのシンガーたちも、男性が一人で歌うものもあれば、男女のグループが歌うものなど、いろいろあったが、だれが歌っているのかなどは意に介さず、とにかく流して聴いた。その中で素朴ななかにも美しいメロディーで、自然と心に留まる歌が一つあった。それがこの“Deportees”だった。

はじめは、歌詞がよくわからなかったのだが、何度も聞き返して歌詞を書き取り、それをボブにチェックしてもらい、その意味が次第にクリアにわかるようになった。また、ボブも情感を込めて、その歌の背景となった史実について説明してくれた。

メキシコ人移民の果樹園労働者

長いあいだ、カリフォルニアの農業の中心は果樹栽培だった。当時、仕事を求めてカリフォルニアに移民するメキシコ人があとをたたず、果

樹園の経営者も低賃金のかれらを好んで雇ったという。しかし、過酷な労働を押しつけ、さんざん働かせたうえに、まともな賃金を与えずにメキシコに追い返すということがまかり通っていたという。追い返す理由は、そのメキシコ人の集団のなかに一人でも移民ビザが完備していない者がいると、その責任をグループ全体に取らせ、全員を国外追放処分にしたのだという。違法入国者が混じっているとわかってはすぐには追放せず、さんざん働かせた末に追放する。むしろ、追放するときの理由にするために見て見ぬふりをしたのだという。

そして悲劇は1948年1月28日に起きた。彼らをメキシコまで国外追放するために州がチャーターした飛行機が、オークランド空港から飛び立ったものの、カリフォルニア中部のロス・ガトス溪谷の上空で原因不明のトラブルが発生し、エンジンから火を噴き、そのまま墜落して乗員・乗客が全員死亡した。その悲劇を伝える共同通信のラジオ放送は、機長、操縦士、パイロット、客室乗務員の4人の乗員の氏名・年齢を報道したが、乗客であったメキシコからの移民たち28人は、一人として名前を呼ぶこともなく、ただ一括して「合衆国に不法入国していた追放者たち (deportees)」とだけ呼ばれた。

この悲劇は、メキシコ系移民をはじめ、人権運動家たちの猛批判を呼び起こした。そして、彼らと同じく怒りを覚えた、心あるアメリカ人の一人が、当時既にフォーク・シンガーとして人気を博していた歌手、ウディー・ガスリーだった。この歌は、当のメキシコ人たちの立場に感情移入して、かれらの心情を吐露することばで歌われている。

死者の声を聴く

死ぬほど働いたすえに、賃金をまき上げられて追い返される悔しさ。おれたちは名前を奪われて、ただの「追放者」として飛行機に乗せられる。そして、どうでもいい存在として、枯れ葉のように溪谷に舞い落ちていく。神を信じ、幸福な

生活を信じて、こうやってアメリカにやってきたのに、神は助けてくれないのか。いいや、この国のやり方にかかれば、神さまだってきっと名前を奪われて、この飛行機に乗せられるんだ。われわれの尊厳なんか一つもありはしないんだ……。物を言わなくなった死者たちの、声にならない怒りと悔しさを、かれはこの歌の歌詞に託したのだった。

この悲惨な歌詞に対して、そのメロディーのなんと美しいことか。ゆっくりと流れる三拍子の長調のメロディー。それは澄み切った青空のように、迷いがなく、すべてを見通しているかのようであった。私が借りたCDでは、若い女性シンガーの独唱から始まるが、淡々としたなかに、強い揺るがぬ意思を感じさせるような、不思議な力をもった歌声だった。

いわゆるサビの部分は、最も印象的で、そして何度も繰り返される。このなかにわずかながらスペイン語が交えられている。“Adios mis amigos, Jesus y Maria” (さようなら友よ、イエスさま、マリアさま) と。それは神イエスと聖母マリアに訴えかける真実の叫びの一行なのだ。そして、複数の男性シンガーがからみ、歌は次第に力強くなり、墜落の悲劇を歌う箇所では、特別に力強い歌声となり、頂点に達したあと、諦観^{ていかん}を得たかのように、むしろ静まって終わる。

美しい悲劇の歌「さとうきび畑」「イムジン河」

史実の悲劇を歌った歌には、これまでも私の心を捉えて放さない歌が二つある。一つは1967年に寺島尚彦さんが作詞・作曲した「さとうきび畑」。寺島さんが沖縄を訪問した際に、ひめゆりの塔につづく一面のさとうきび畑を前にたたずんだとき、その土の下に戦没者の遺骨がまだ埋もれていることを聞いた、その衝撃がきっかけとなって作った歌なのだそう。あの太平洋戦争での沖縄戦で父を失った人の悲しみを、滔々と歌っている。森山良子さんのレコーディングが知られているが、私は一度テレビで、沖縄出身の盲目のテノール歌手・新垣勉さんの豊か

な歌声でこの歌を拝聴し、その後しばらく耳から離れなかった。

もう一つは、作詞も作曲も北朝鮮の人による「イムジン河」。ザ・フォーク・クルセダーズのメンバーが京都の中学生だったころ、近所の朝鮮中級学校の生徒たちが歌っていたのを教えてもらったのがこの歌だったそうだ。その後、そのかれが歌詞の日本語訳を作り、1968年にこのグループによりレコーディングしたが、発売予定日の直前に発売が中止された。南北朝鮮を縦断して流れる臨津江(イムジン河)の上空で、自由に南北を行き来する水鳥を見つめながら、祖国分断の悲しみを歌った歌である。数年前、幻の録音が30年以上の時を経て発売された。これもテレビでたまたま流れているのを聞き、「だれが祖国を二つに分けてしまったの」という歌詞のところで、絶妙にハモっているのが耳から離れなかった。

この二つの歌も、そして“Deportees”も、ゆったりとした長調の、どちらかといえばシンプルなメロディーで、どこまでも清浄な美しさに満ちている点が共通している。また、どれも、雄大な大自然を目の前にし、その美しい情景に心を打たれながら、過去の悲劇に思いを致す点でも共通している。

そして、もう一つ。その悲劇の当事者ではなく、それに共感した芸術家が、徹底的に感情移入して作っている歌だという点でも共通している。

「イムジン河」の原曲は北朝鮮の人が作ったものだが、これに共感して日本語詞をつけたのは、日本人のフォーク・シンガーである。このように、後世に残る、真実の叫びの歌というものには、一つの法則があるように思えてならない。

アメリカの負の部分を見つめつつ

話を戻そう。この“Deportees”は、アメリカという国の負の部分、つまり、拝金主義、思い上がり、心の奥底に根強く残る差別感、などを痛烈

に風刺した歌である。数ヶ月前に、20年以上アメリカで暮らしている同年代の日本人・アンドリューさんと食事をしながら、この歌の話をしたら、かれはしばしうなだれていた。ちょっと申し訳ないことをしたと思った。かれはアメリカが好きなのだ。アメリカにはいいところもたくさんある。アメリカをろくに知らない私が、この歌を引き合いに出してアメリカを批判するなんて十年早いことだ。そうわかっている、この歌の話をしてしまったのは、私のなかに、メキシコに対する共感が強くあったからだ。私はこの歌をメキシコ人の感性で聴いてしまった。どれほど悔しく、腹立たしかったことか。今年初めてアメリカに来た私だが、その前にメキシコには三度行っている。そして、メキシコを代表するトリオ・ロス・パンチョスにはまっている。もう一つの理由は、自分のなかに、弱者の側、貧者の側の視点に立とうとする無意識の習性がどうやらあるようなのだ。私はそのことを恥じるどころか、むしろ生涯の誇りとしていきたいと思っている。

ウディー・ガスリーも、たくさんのフォーク・ソングを残した、アメリカを代表する芸術家の一人だ。かれだってアメリカが好きはずである。むしろ、好きだからこそ、その負の部分に目をつぶることができなかったのかもしれない。この歌を作る原動力となったのは、ある種の贖罪しよくざいの思いなのかもしれない。

今は時代も変わり、そうした差別がなくなってきたはずだ。そして、現にまだ残っている差別の残滓ざんしをすっかり一掃していくのは、われわれ青年の使命でもある。ともあれ、今はただ冷静に、この歌の美しさに耳を傾け、そしてこの歌が、どこまでも澄んでいて、心の奥の方にじんと染み込んでいく、そのありのままに身を委ねることにしたいと思う。

(2005/11/30)